

平成30年度 第2回相談支援体制に係るワーキンググループ活動報告

日 時 H30年7月25日（水）13:30～15:00

会 場 寒川町役場 本庁舎3階 議会第1会議室

出席者：中野委員 牧野委員 小川原委員 長谷川委員

事務局：安田 内藤 佐藤 齋藤 中田 千野 竹内 塩原

議事

1. 自治連との懇談会実施報告

- ・開催日時：平成30年7月20日（金）自治会長連絡協議会後より実施
- ・場所：寒川町民センター1階展示室2
- ・参加人数：自治連（22名）ワーキングメンバー2名（中野委員、小川原委員）
当事者・家族団体2名（山根委員、長谷川委員、）事務局（福祉課：内田、千野、竹内、天野、すまいる：安田、内藤、ゆいっと：佐藤、齋藤）
- ・内容：障がいの種類や区分についての説明、障がい児者向け防災研修の報告、
障がいのある・可能性のある方の困りごとについて（3グループに分かれて懇談会を実施）

※ 懇談会の内容等については、2ページ目の実施概要や3ページ目以降の各グループ懇談内容を参照してください。

- ・今後、民生委員、学校関係との懇談会を実施後、相談ワーキングとして評価を行っていき、評価後に今後ワーキングの在り方や進行についても検討していくこととなった。

2. 民生委員児童委員協議会について

- ・実施予定日：平成30年12月12日（水）の午後
- ・参加メンバー：民生員児童委員役員とワーキンググループメンバー

3. 次回ワーキンググループ

- ・活動予定日：H30年10月5日
- ・時 間 ：午後（詳細未定）
※詳細が決まり次第、お知らせします

寒川町自立支援協議会 相談支援のつながり創り企画

自治会長連絡協議会との懇談会 実施概要

日 時	2018年7月20日（金）
会 場	寒川町町民センター1F
自治連参加人数	22名
事務局参加人数	10名

1、実施内容

- ① 障がいの種類や区分についての説明
- ② 障がい児者向け防災研修の報告
- ③ 障がいのある・可能性がある方の困りごとについて各グループでの懇談

2、グループ懇談で出された意見や内容（抜粋）

- ・親亡き後の地域の支えの必要性
- ・障がい者との関係づくりの難しさ
- ・各事業所や機関の活動を知ってもらうための活動を行ってはどうか
- ・障がい者理解促進のための活動実施
- ・障がいがある方への具体的な支援、対応方法を知りたい
- ・恐怖心があり、かかわりを控えてしまう
- ・地域の中で障がいに関して相談できる機関や事業所が一目でわかるようにパンフレットが欲しい
- ・幼少期の支援が大事ではないか。（障害がある子どもを）隠そうとするのではなく、オープンに育てられる町づくりが必要

3、懇親会で出た新たな課題

防災・避難時に関する課題

- ・避難場所で障がい者にとってわかりやすい提示物とその備蓄
- ・避難時の対応モデル
- ・要支援者リストが網羅されていない不安
- ・避難時・避難所等で「支援が必要」なことがわかる工夫（ゼッケン等）

4、感想

- ・懇談会を実施して良かった。
- ・自治連としても障がいに対して意識されていることや取り組もうとされていることがわかった。

【 1 グループ 】

○懇談内容

① 災害時の避難行動要支援者名簿について

現状や課題など

- ✓ 避難行動要支援者名簿を作成したが、個人情報との関係で、当事者の家に訪問できず、リストの活用方法について行政から先行事例の紹介や活用提案等、何も示されない。
- ✓ 避難行動要支援者名簿の提出をし、地域の防災訓練にも参加した際に名前を記入したが、何も声がかからず、何のために名簿を作成しているのか？どこに名簿がいかされているのか？と疑問に思った。
- ✓ 自治会によっては、自治会長や班長又は民生委員は名簿を見ていて、どこにどんな方が住んでいるかは連携を取り合い把握している。ただ、個人情報なので、お宅へ伺うなどができないでいるというのが現状。また、顔見知りか否かで、助けてもらえる優先順位が違うので、地域に知ってもらうことが必要。

② 当事者・家族の思い

ひとりでは通学できないので、親子で通学を練習していた。今も作業所への通所のため、バスを利用している。

以前、ひとりで利用していて降り過ぎたとき、バスの運転手に親切に誘導してもらえた。

親も年を取るので、これからの生活が心配。グループホームを希望しているが、なかなか設置されないし、できたとしても町外が多い。できれば、親が動けるうちにホームに住んでもらい、自立した生活を後押ししたい。

また、災害や犯罪に巻き込まれないかも心配。

本人は「嫌だ」や「助けて」も言えない状態であり、知らない人に付いていけない心配な一方で、災害時など緊急時の避難誘導に本人がついていくのかも不安。

③ 障害者と接する機会について

- ✓ 会社において、労働基準監督署より障害者の雇用を言われるため、そこでふれあう場面・機会がある。その際、多数の従業員と少数の障害者就労者となったとき、多数側は障害者就労者のことを知っているが、逆に障害者側は知らない。

そのため、こちらから声をかけても、障害者側は警戒しているのか、障害特性なのか、わからないが、反応として一歩引いたり、表情に出してくる。そうになると、声をかけた側としては、「触らないでおこう」となってしまう。

ただ、今の時代、知らない人と話さないとか、ついて行かないとなっている、難しい時代である。

- ✓ 周りの方々には子どもの障がいことを知ってほしいと思っていて、積極的にコミュニケーションをとろうとしている。

昔、路線バスのバス停で待っているとき、知らない人から声をかけられたが、うれしかった。子どもの障害のことを知っていること、気にかけてくれていることが、心強いと感じ、また、その気持ちをもていただけたことが、ありがたかった。

- ✓ 自治会の立場から、障がいにかかわらず、できることは自分で、できないことは周りにお願いするのが基本だと考える。

周りにお願いをしていくためにも、日ごろから近所と接する時間をつくる必要がある。

しかし、現状は、近所と接していない。

地域の方々に知ってもらうために、障害者の方々とふれあえるイベント(虹色の仲間たち、つくしの家まつり、にっこりマーケット等)の周知がもっと必要である。当事者・家族からまわりに、まわりから当事者・家族に接していく地域づくりが必要である。

【 2グループ 】

○懇談内容

①認知度の低い障害について

・本人による体験談

くも膜下出血になったことがあり、その後、高次脳機能障害(脳に損傷を負うことで、記憶障害、注意障害、遂行機能障害、社会的行動障害といった症状がでることがある。)と診断された。自分は脳の感情のコントロールをつかさどる部分に影響が出たため、社会的行動障害の症状が出て、感情の抑制が難しくなってしまった。3年のリハビリを終えて、現在は通常の生活に戻っているが、高次脳機能障害が認知度の低い障害のため困ることがあった。

・困ったこと

高次脳機能障害は目に見えない障害で、認知度も低い障害のため相手に理解されないことが多く、とても苦労した。「昔と変わった」、「怒りっぽくなった」と言われて、相手に説明してもなかなか理解をしてもらえなかった。

※高次脳機能障害以外にも精神障害は目に見えない障害で、高次脳機能障害と同じように人によって障害の出方も違う。目に見えない障害を持っている人は、実際には支援を必要としているが、周りから支援が必要でないように見えてしまうことが多い。

・望むこと

世間の認知度が高くなって欲しいと思っている。会社に勤めている人でも事故によって高次脳機能障害になってしまう人がいると思うが、周りの人が高次脳機能障害のことを知っていて、理解をしてくれるだけでも楽になると思う。

・その他

高次脳機能障害は障害として認められて15年ほどしか経っておらず、世間の認知度は低い。2グループ内でも知らない人が多く、どういう障害で、どんなことに困っているのか、今日初めて知ったという方や高次脳機能障害という言葉は初めて聞いたという方もいた。

②防災について

・困っていること、課題に関する意見

- ✓ 災害時要支援者名簿は希望しない人は届を出さないが、実際には支援が必要な人もいる。民生委員を通じて、書いてもらうように呼び掛けているが、全員が出すわけではない。出してもらう比率を増やしたいと思っている。
- ✓ 話をしないとどんな人かわからないため、家族の人とも話をして防災に活かしたいと思っているが、障害を持っている一人住まいの人については、話を聞くことが難しく、どうすれば良いかわからず、困っている。
- ✓ 病気や障害に差別的な人もまだいる。病気で辛いのに、精神科に通っているということが知られて、差別されるとさらに嫌な気持ちになってしまう人がいる。防災の面では良くて、日常生活で本人が辛くなってしまう場合もあるため、災害時要支援者名簿を希望しない人が出てしまう。

・取り組んでいること、改善策に関する意見

- ✓ 自治会の中で5世帯くらいの班を作り、その中では情報をオープンにしている。
- ✓ 防災の面から考えると、どこにどんな障害の人が住んでいるのかがわかると手助けしやすい。
- ✓ 相手に障害があるというのがわからなければ、支援出来ないこともある。相手が聴覚障害だと知らなければ、災害時に急げや早くと言うだけになってしまうが、相手が聴覚障害だと知っていれば紙に書く等の伝え方ができる。
- ✓ 配布された資料の中に、名前と障害名を記載したゼッケンを着ている写真があったが、最初からゼッケンを持ってもらうことができれば、災害時に助けやすい。ゼッケンがあれば本人のことを知らない人でも、その人に合った支援をすることができる。
- ✓ その人にどういう支援が必要なのかを知りたい。災害時要支援者名簿に障害名が記載されているが、どういう支援が必要なのかかわからないこともあり、どういう支援を必要としているのかわかるものがあると良い。

【 3 グループ 】

○障がいの概要説明についての質疑

Q 1 寒川町におけるの現在の障がい者数と傾向について

A 1 障がい者数については、町の人口に対し、4.2%の方が手帳を所持している状況。神奈川県内の平均は3%強。全国では5%程度。全国から見たら少ないが、県内では高めである。傾向については、高齢化が影響して、高齢者の手帳取得が増加している。また、子どもの出生率は減っているが、養護学校等を利用される方はずっと横ばいの状態。出生率は減っているが、障がいのある方の人数は変わらない。出生率は下がってきているが、障がいのある方の割合が増えてきていると言える。実際の福祉サービスの支給の状況としては、利用者数は大きな変化はなく、1人当たりの利用量が増えている状況。

Q 2 子どもの障がい比率は

A 2 文科省の統計によると、発達障がいの割合は、6.3%と言われているが、事業所で、保育園や幼稚園を訪問している中で、ある幼稚園では、1学年約60人のうち、発達が気になるお子さんが8人であった。実感としては、1割。発達障がいのお子さんは、普段遊んでいるところでは目立たないが、いざ、椅子に座ってみると、10分と座ってられないなどの行動が見られたりする。能力的には高いお子さんも多い。

○懇談内容

- ① 発達障がい認知されたのは、50年前頃で、少しずつ認知されるようになってきている。そういった中で、気づかず大人になり、30代40代過ぎて、初めて発達障害と診断される方も多くいる。小学校などもっと早い段階で、療育を受けられれば、改善される。年齢や障がいの特性に応じた支援ができていれば、その方が地域で、自身の力で生きていける。そもそも最初から粗暴の激しい方はいない。環境の中で作られてきた障がい（2次障がい）と言われている。
- ② 災害時要支援者名簿を寒川町では整備している。対象者が約2,800人と言われているが、実際に手を挙げてくるのは800人。支援が必要な方でも届を出さない人はもっといる状況。①と同じ傾向。子どものころから、こういう制度がある、仕組みがある。いざという時のために利用してくことが大事だということを、周知していく必要がある。恥ずかしい、知られたくない、家族だけで・・・という意識を変えなくてはならない。
- ③ ①、②に言えることは、「自分は〇〇に困っています。」「家族にこういう障がいをもった人がいます。」ということを言える地域にしていくことが重要。それがないと、当事者の方やその家族の意識を変えることは難しい。

④ 介護場面や障がいについて、自治会長に上がってくる相談からみえてきたこと

- ✓ 高齢者のみの世帯などは、自治会長や民生委員が中心になり、電気がついているかなど日々の生活の確認や、定期的な訪問を行うなど、地域で見守りを行い、必要に応じ、役場や警察への連絡をしている。
- ✓ 身近に障がいのある方がいても、日々の生活から緊急時の対応などについて、きちんと話し合われていないことが多い。
- ✓ 障がい当事者やその家族にとって、「〇〇さんはお元気ですか。」等と声をかけられることも、心強く感じる。弱者に対する地域からの支援について、これからしっかりと考えていかなければいけない。
- ✓ 知的障害や、精神疾患を患っている方について、時として、危険な行動をとられる場合もあるが、地域みんなで見守っていこうという感じになっている。
- ✓ 自治会だけでは、できることに限界があり、民生委員との連携は重要。
- ✓ 障がいのある当事者やその家族からは、特に困っているなどの相談を受けてはいないものの、面倒を見ている家族の高齢化が進んでいるような世帯は多く見受けられる。

⑤ 防災について

- ✓ 「避難所にこういうものがあつたらいいよね」というものが、健常者にはなかなかわからない。障がいのある方にとって、何が必要か等、具体的に示してもらえるとよい。災害弱者が安心して暮らす、生活するために必要なものであれば考える。

(例)

- ポップや絵カード、
- こういう障がい者なら避難スペースがこれくらい必要。教室に何人くらいまでなら大丈夫など。
- ✓ 自治会長も入替があることもあり、いつも会議では同じ内容の話ばかりで進んでいない。今回の会議で課題を共有したので、今後は、共有しただけでなく、行動に起こしていかななくてはならない。
- ✓ 障がいのある方やその関係者には、お願いすることが悪いということではなく、発災時に安心して暮らすために何が必要か、まず発信してほしい。
- ✓ 日ごろからの隣近所の状況を互いに知り、交流することが必要。

○その他

団体や相談先について、さわりだけでも用紙1枚にまとめた方がよい。回覧などしてもよい。